〈翻刻〉宗祇『万葉集注抄書』（上）

長谷川　千　尋

宗祇『万葉抄』は、萬葉集叢書第十輯『萬葉学叢刊　中世編』（臨川書店、一九七二年）に収録の所謂「広本系統」（書名「万葉抄」）が利用されてきたが、前稿で「略本系統第一種」とされるもの（書名「万葉集注抄書」）こそが、宗祇の著作の原形であると論じた（「宗祇『万葉抄』考」、『國語と國文学』第百二巻第三号、二〇二五年三月）。これを承けて本稿では『万葉集注抄書』の全文の翻刻を行う（第六までを今号に掲載し、以下は次号以降に掲載の予定）。翻刻に先立ち、『万葉集注抄書』の現存諸本について簡単に報告する。

①宮内庁書陵部蔵桂宮本『ならの葉』（405―123）

袋綴一冊。左肩題簽「ならの葉」。内題「萬葉集注抄書第一」。宗祇奥書の後に「文亀二年二月五日於越後国府中旅窓写畢」「此本所持之処先年紛失、如今田右京進（厳島社神人）本一覧之次令書之者也／文禄甲午臘天上澣　幽斎玄旨」。国文学研究資料館の電子画像公開。

②宮内庁書陵部蔵鷹司本『万葉集注抜書』（鷹104）

袋綴一冊。左肩題簽「萬葉注抄」。内題「萬葉集注抄書第一」。宗祇奥書のみ。

③石川武美記念図書館成簣堂文庫蔵『萬葉集註抄書』

袋綴一冊。左肩題簽剥落跡に外題「万葉集注第一」。内題「萬葉集注抄書第一」。宗祇奥書の後に「文亀二年二月五日」「永禄五年仲春之比書写之、但不審雖在之先如本染筆訖、他本期交合耳　東麓桑門」。加持井御文庫旧蔵。

④正宗文庫蔵『万葉注』（上西イ二）

袋綴一冊。左肩題簽「萬葉注」。内題「萬葉集注抄書第一」。宗祇奥書の後に「文亀二年二月五日於越後国府中旅窓写畢」。国文学研究資料館の電子画像公開。

⑤東洋文庫岩崎文庫蔵『萬葉集註』（一Ｃ56）

袋綴一冊。左肩題簽「万葉集註」。巻頭「萬葉集注釋巻第一」以下第八丁裏までは仙覚『萬葉集注釋』序文（『万葉集注抄書』の本文とは別筆）。内題「万葉集注抄書第一」。宗祇奥書の後に「一校畢」「明応元年十月廿八日」「一雲」。伝勧修寺政顕筆。『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅵ』（東洋文庫、二〇一一年）に巻頭や奥書等の書影が掲載される。

⑥実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵『萬葉集註抜書』（五三八）

袋綴一冊。左肩題簽「萬葉集註抜書」。内題「万葉集注抜書第一」。宗祇奥書の後に「（本云）弘治元年卯月上州下向之折節、遊行廿九代上人

厩橋光明寺御念仏中千句御興行功之。遂向顔哥道之中御談合次、後撰正義預御懇望難去而令出畢。然者此抄可書写之御免許。不移時刻憑他筆書写之訖」「享保三戊春市にて求るもの也。／青木主計頭書（花押）」。

⑦関西大学図書館蔵『萬葉集宗祇抄』（C―911・224―S1―1）

仮綴一冊。外題なし。内題「万葉集注抄書第一」。第一から第十四までを範囲として七十八首の歌注を抄出。次に「公事根元抜書」を付す。奥書「宗養法師以手沢本書写畢／慶長十五暦首夏上旬　法橋玄仲（花押）」。国文学研究資料館の電子画像公開。

諸本間の異同は少ないが、①～④の本文が近似するのに対して、⑤は、それらの諸本に無く、萬葉集叢書の底本である成簣堂文庫蔵雀軽子本と一致する本文を僅かに備えている。本稿では、越後滞在中の宗祇のものと推定される文亀二年（一五〇二）の奥書を備えた①桂宮本を底本とした。桂宮本の書写の精度は高いが、第九以降に都合二十七首の歌注の欠落がある（④も同様）ため、それらは校合本で補った。校合本には⑤東洋文庫本を用い、なお不審の残る箇所は②鷹司本で校合した。翻刻に際しては、私に句読点、濁点を施し、漢字は通行の字体に改めた。施注歌の末尾に『万葉集』の歌番号を付し、長歌は各句の間に空白を設けた。底本の誤脱や、校合本に主要な異同がある場合は、⑤の本文を［　］、②の本文を〈　〉に入れて本文中に補入するか、傍線を付して傍記した（傍線のない本文への傍記は校合本の傍書である）。

〔付記〕資料の翻刻をご許可下さいました宮内庁書陵部に記して御礼申し上げます。典籍の閲覧に際しては、宮内庁書陵部の他、石川武美記念図書館、東洋文庫にご高配を賜りました。

万葉集注抄書第一

雑歌　　雄略大泊瀬［稚］武天皇

泊瀬朝倉宮御宇天皇代　［天皇御製］

こもよ　みこもち　ふくしもよ　みぶくしもち　此岡に　なつむすこいへきか　名つげさね　そらみつ　やまとの国は　をしなべて　我こそおらし　つげなべて　われこそおらし　我こそば　せなにはつげめ家をも名をも（一）

此哥の点、色〳〵にあれ共、是は新点にてよし。仍書之。籠とは菜摘かたみ也。ふくしとは、菜摘ときかねなどにてしたる物也。すことはいやしき者也。子といふは男女にかよふ。此哥は童女也。わぎも子などいふがごとし。名つげさねとは、名をつげよと云詞也。さねは詞の助也。さねといふ詞、此集に多し。御製の心は、天皇野遊のとき叡覧のてい也。籠もよき籠をもち、ふくしもよきふくしをもちて、此岡になつむ女、家をきかしめ、名を告よ、日本国は皆是吾しめ給所也。我こそは、せなには家をも名をもつげめと詠給也。彼女艶女の故如此あそばす也。籠もよき、ふくしもよきは、思ふものゝもてるほどに、よきとみゆる也。空みつ大和国とは日本紀の詞にて、こゝに別而のこゝろなし。

やまとには　むら山ありと　とりよろふ　天のかぐ山　のぼりたち　国見をすれば　国はらは　煙［たち］たつ　海原は　かもめたちたつ　おもしろき（下略之）（二）

此哥は、岡本御宇、天皇かぐやまにのぼりて御製也。大和[に]はむらやまありととりよろふとは、大和国にはくだけてむら〳〵なる山多き国也。彼山にて遙国をのぞみてあそばしけるさま也。国はらとはたゞ惣国のひろきさま也。それに民の戸のけぶり立たるさま也。海原とは、大和より海のみゆべきならねど、日本のあるじにてましますす間、海内も心の中にして、かもめは海にたつ物なれば、煙などに対してよみ給へる也。眺望の心も侍るにや。面白国も其心たるにや。又、国さかへたる心も君の心にはさも侍ぬかし。

やすみしく（しイ）　我大君の　あしたには　とりなでたまひ　夕には　こと[よ]りたてりし　みたらしの　あづさの弓の　中はずの　音す也[下略之]

（三）

此やすみしゝは八島しろしめす也。我君の大八島をしろしめす心也。八方といふ義あれ共、天地を残すべきにあらざる間、難有。此詞はやすみしると云所もおほし。まくら詞とみえたり。御たらしあづさ[の]ゆみはかさなる詞也。みたらしとは御弓也。みとらしともいへり。相通の故也。中はずとはなづといふ事也。同韻相通のこと葉也。弓は兵かきなづる物なれば、朝には執なでと詠也。音すなるとは、つるうちの音也。

たまきはるうちのおほ野にこまなべて[下略之]（四）

玉きはると云、常の尺には玉しゐきはまる義、[緒]慥終のよしを尺す。玉きはる命などよめる哥には可然候。[但]、如此のことは、詞は同けれども、下のこゝろかはれる事多し。此哥の玉きはるうちといふは内裏也。玉きはるとは、厳麗きはまると云こと葉也。是うちといはんためによそへよめる詞也。玉しゐきはまる儀ならば、争天皇野遊のときさる禁忌の詞を詠ぜん哉。うちの大野といふは大和国宇智の郡の野なり。いまは内野といへり。古は内の大野といへり。玉きはるうちの大野は枕詞也。

秋の野に尾花かりふきやどりせしうぢの都のかり庵しぞ思ふ（七）

此哥の点に、みくさかりふきともあり。誠の草の義也。人丸の哥に、人はみなはぎを秋といふいな我はおばながすゑを秋とはいはんとよめり。お花を草の中にはほめたる義也。宇治の都はかりの宮也。菜葉云、此哥は、皇極天皇、近江比良宮に幸時御製也。比良の内の都也。何ぞ山城の宇治と意得哉。彼宇治は、稚郎子（ワカイツラコ（ママ））ましますといへども、即位もなくて崩給しうへは都と云がたし。故代々達者哥枕にもあげず。八雲御抄の皇后[宮]目録にも入させ給はず。大納言光俊、此哥を取て、やどりするひらの都のかり庵にお花みだれて秋風ぞ吹　但今の御製注云、山上憶良大夫類聚哥林日戊申年幸比良宮時御哥と云々。但日本紀云、天皇吉野宮御幸して豊のあかりきこしめす。其後近江比良に御幸し給。是をもつて是を推するに、吉野宮より比良宮へいます時、宇治にかり庵を作おはしましけりとみえたり。此御哥の句やどれりしとて、第五句にしぞ思ふといへり。思やる詞也。当所の京とはみえざるをや。当国風土記曰、謂宇治は応神の御子[宇治]稚郎子、相[相]原日桁（ケチ）の宮を作て宮宅[室]とす。よつて御名を宇治と申といへり。彼是、宇治宮〈古〉無相違者哉。宇治王子崩御の心を、昔見し人の涙や露ならん世をうぢ山の秋の花ぞの慈鎮　白露に散や過なゝん山城の宇治の都の秋萩の花衣笠内府　如此云上は、宇治にも無相違哉。

君がよも我世もしれや岩代の岡のくさねをいざむすびてん（一〇）
是は有馬皇子、此岡にて松をむすび給けん事を本哥にてよみ給へる也。
わが思ひし[ほりしイ]野島は見せつ底ふかきあこねの浦の玉ぞひろはぬ（一一）
是は紀伊国幸時の御哥也。野島は紀伊国也。かゝる所をばみせたれど、あこねのうらの玉ぞひろはぬとよめり。私云、あこねのうらは、夫婦のちぎりの事をいへる事あり。伊勢物語の秘事也。其心にて、玉ぞひろはぬは恋のこゝろなるべくや。
わたつみのとよはた雲に入日ねし今夜の月夜[はイ]すみあかくこそ（一五）
とよはた雲といはんとてわたつみとをける歟。海の古語也とも尺せり。夕日にあたる雲のあかきいろなるが幡ににたりといへり。入日よき時は月光晴也。入日ねしといふをさしと点ぜるもあり。心大やう也。ねしといふはやはらぐといふことばなれば、入日やはらひでは晴天たるべきことのいはれかなへり。
冬ごもり（長哥）　春さりくれば（一六）とは冬木の姿也。春くればといふ心也。
うまさかの　三輪山（一七）を、あぢさけのと点ぜる本あり。酒のみとつゞくるよし也とかや。神の御為と作たる酒、殊目出かりければ、うまさかの三輪といへる。神酒といひて三輪を詠[と調]ずる、此故也。
そまかたの　はやしはじめ（一九）といへるは、林のしげくて杣山などの形のごとくはやしはじむる心也。
あかねさすむさきのゆきしめ野ゆき野守はみずや君が袖ふり[る]（二〇）
此哥の尺に、あかねさすと云、天皇の御幸なるが故に、王をば日にたとへつれば、あかねさす日の心にいへり。次紫野は山城也。しめ野は大和也。彼御遊の狩の間に行廻給ふと尺せり。此儀不可然。紫野、標野、蒲生野にあり。あかねさすと云発句は古語のよそへ事也。紫は其根赤き物也。又、紅葉に浅深ありといへども、たゞあかきにとれり。紅を浅赤とかき、紫[を]ば深赤とかけるは此義也。
紫のにほへるいもをにくゝしあらば人づまゆへに我恋めやも（二一）
是は女を紫にたとへたり。又うつくしき姿なるべし。
うつあさのをみの大君あまなれやいらごが島の玉藻かりしく（二三）
うつといふは物をほむる詞の随一也。よきあさのをみといふ詞也。
春すぎて夏きにけらし白たへの衣ほすてふあまのかぐ山（二八）
菜葉云、此山に衣をほすと云事、甘橿[アマカシ]明神とてましますは、人のまことそらごとをたゞし給。然ば衣を神水にぬらしてほすと申伝たり。正儀を不知。今考之。香具山は藤原の宮の御宇離宮とみえたり。其故は、当集第二長哥に、わが[大]君のよろづよとおぼしめしてつくれりし香具山の宮万代にとあり。同第三巻之長哥の詞に、天のかぐ山霞たち春にいたれば松風に池波立てさくら花とあり。池なども有ける也。この山に昔人すめるゆへに衣をもほしける歟。必科をたゞすばかりにてはあらじ。又、卯花さきて衣ほすにたるとも申にや。私云、衣ほす義、ふるくいひならはせるを用にことたれり。此哥の春過て夏きにけらしと侍こそ、おなじ詞にてきこえ侍れ。さるいはれ侍る哥也とかや。新古今に入り。御門おほくましませども、百人一首にもこの持統天皇御哥いれり。此哥によれりと申人侍き。
玉だすき　うねびの山（二九）とは、田をすく心によそへたり。田にうねとてあれば如此いへり。うねびの山は日向国なり。うねび[山の]か

しはらとよめり。

あまさがる　ひな(二九)、ゐ中などにては空もひきくみゆると云尺あり。不然。あまさがる日とつゞけんため也。日の空をさがりめぐる事、すこしもけんだんなき也。日といはんため也。うといはんとてまとりすむといふがごとし。

白浪のはま松がえの手向草いくよまでにか年のへぬらん(三四)

この手向草をすまひ草と点ぜる本あり。不可然。神に奉る物を松の枝にかけをきたるを、はま松がえの手向草とよめり。苔をも申とかや。[第三の句]

あめのしたに　国はしも　さはにあれども　山河の　きよき河内の　御心も　よしの丶(三六)とあり。下略之。人丸吉野幸時長哥。さはにあれど[もと]は、おほくあれども。此吉野の国はすぐれて滝の宮古はみれどあかぬとよめり。私云、たづさはになくとはさはぐといへり。以是おもふに、それもおほき心歟。

みれどあかぬよしの丶川のとか[に](三七)といへるも、つねになめらかなりとほめたる也。

しほさゐにいらごが[の]島へこぐ舟にいものるらんかあらきしまわを(四二)

しほさゐ一義云海のしほさしみちてゐたるを云。一義云しほさき也云々。両義内には塩さきは、波あらくて舟こぐ事大事なれば、あらき島輪をと心もとなくおもひやるにかなへり。第三巻哥に、しほさゐの波をかしこみあはぢしまともよめり。是もしほさきになみのあらき也。かしこみはをそる丶心也。

我せこはいづちゆくらんおきつ藻のかくれの山をけふかこゆらん(四三)

かくれの山は伊勢の名所也。おきつ藻はかくれたる物なれば、かくれのやまとよそへつゞくる也。第十一巻にも、おきつもをかくさふ波のいを五百重也へなみなど読り。立田をよまんとておきつしら波などいへるがごとし。

こもりくの　はつせの山は　槙たてる　あら山道を　岩がねの上下略之(四五)、軽皇子宿安騎野ニ給時人丸の長哥也。こもりく、こもり江両義也。泊瀬に槙たてるあら山道とよめり。又、安騎の大野にはたすゝき共、同長哥によめり。

安騎の野にやどる旅人打なびきいもねられじやいにしへおもふに(四六)

打なびきいもねられじやとは、ぬるすがたをなびくとよめり。[る也]

あづまの丶煙のたてる所みてかへりみすれば月傾きぬ(四八)

菜葉云、東野は芳野にあり。あづまさり[か]とて有といへり。近来の哥人、むさし野・と心得たり。比興の事也。此哥をとりて続古今ニ、雲こそは空になからめあづまの丶煙も見えぬ夜半の月かげ

長哥

あらたへの　藤原のうへ(五〇)とあり。藤のさまあらき也。あらたへの布絹(きぬイ)をだにとよめる、同事也。此哥の中に、石はしるあふみの国と侍るは、[岩はしる]あはといふ義也。水のあはの心也。あは海ともあふみをいへり。衣手の田上とつゞくるは、衣の袖をば手のうへにかくる物なれば、田を手の心になせり。ものゝふの八十うぢ河、或はものゝふの矢と[つゞけ]、又は八十の氏[の]ことにいへり。又は、武士の八十氏と云物芳野にあるを、天武のとき此河上にをかれて、それよりいへるともいへり。

文おへる　あやしき亀も　新世と　泉の川に　もちこせる　真木のつ

ま手を　百たらず　筏を[に]つくり　のぼすらん(五〇)、文おへるあやしき

亀とは、賢王聖主の時い[出]へることあり。[大国にも]四季を色にあらはす亀ありき。史記にみえたり。和国には霊亀元年出。又神亀六年のとき出来たる。背に文字等ありて姿色々也。九色をあらはせり。注委けれ共略之。心は、時代をほめて泉下に筏の竿をちらしたるやうなるを、もゝたらずといへり。八十一の心也。然ばかゝる世に文おへるあやしき亀も出来るなんとよめり。

たをやめの袖吹かへす飛鳥風都を遠みいたづらに吹(五一)

明日香より藤原へ宮移りして志貴王子のよみたまへる。心は、飛鳥都にて有しときは、飛鳥風も宮女の袖を朝夕吹かへしたるが、今都うつりて遠ざかれば、いたづらに吹とよめり。

こせ山のつら〳〵椿つら〳〵に(五四)とは、物をつら〳〵とみる也。めもかれぬ心也。私云きら〳〵としたる椿を云也。

ひくまのにほふはぎはら(五七)の哥、只哥の面に聞ゆ。

ながらふるつまふく風のさむきよにわがせの君はひとりかもぬらん(五九)

ながらふるつまふくかぜとは、よるの衣をふみくゝみてねたるつまを吹かぜもさむきよは、わがせの君は独かぬらんといたはりて思やるうた也。私云、夜の衣をながくふみくゝみたる事さこそあらめど、別て程へぬれば、ながらふるつまとよめるか。然を夜の風[風]などの身にさむく吹たるとき、男をおもひやりてよめる哥歟。

ますらおのとも矢たばさみ立むかひいるまとかたはみるにさやから[け]し(六一)

立むかひとは、弓いる姿也。とも矢[手ばさみ]とは、矢をゆびにはさみている也。

いざこどもはや日本へ大伴のみつの浜松まちこひぬらん(六三)

此哥は、山上憶良入[唐]道して本郷をおもひてよめり。別の心なし。

あしへゆく鴨のはがひに霜ふりてさむき夕は大和しぞ思(六四)

此哥は、慶雲二[三]年幸難波宮時志貴王子作哥也。誠さびしく物哀にて、故郷をおもふ心もさこそとおもはるゝ哥也。

大伴のたかしのはまの松がねを枕にぬれど家しおもほゆ(六六)

幸難波宮時の哥也。たかしのはまは津のくに也。此哥の心、大伴のたかしの浜の松、所おもしろし。其松がねを枕にぬれど、なを故郷の恋しきとよめる歟。

大伴のみつの浜にある忘貝家にあるいもを忘て思や(六八)

此哥の心、みつのはまにあるとへども、家にあるいもをばいかで忘ぬぞといふ也。やもとがめたるや也。

みよしのゝ山下風のさむけくに(七四)、吉野の幸時御哥也。旅心也。

宇治間山朝風さむしたびねして[に](七五)、是も同時長屋王のうた也。心又おなじ。

とぶとりのあすかの里をゝきていなば君があたりはみえずかもあらん(七八)

私云、此哥は新古今に[も]いれり。をきていなばと云に、おくのおをかける本あり。不可然。和銅三年春二月藤原より奈良の都へうつり、御こしを長屋の哥[原]にとゞめて遠望故郷時の御作哥也。されば、故郷の飛鳥をゝきていなば、すぎにし君があたりは見えずかもあらんとよみ給へるならし。

山辺の御井をみがてら神風(八一)の哥、和銅五年長田(ヲサ)王を斎宮に遣時、山辺の御井にてよめり。別心なき歟。

わたつみのおきつしらなみ立田山いつかこえなんいもがあたりみん(八三)

私云、此哥も同所にてよめり。立田山といはんとて、おきつしら波と云、興津白波といはんとてわたつみと云り。しきしまの大和にはあらぬから衣のごとし。されば此哥以て顕昭法師は、彼興津白波立田山夜半にや独の哥をもぬす人ならずともといへるにや。

万葉集注抜書[抄]第二

相聞　恋の哥の事也。

かくばかり恋つゝあらずは高山の岩ねしまきてしなまし物を(八六)

此哥第二句、恋つゝあらずはと云は、恋つゝあらんずるにはといふことば也。此類多し。

ゐあかして君をばまたんぬば玉の我くろかみに霜はふる共(八九)

ぬば玉ともうば玉とも云り。夜の心、又くろき心也。ふたつの差別色〳〵に申せども、只多義[両]いづれにも付べし。又、うちなびき我くろかみとよめり。かみはながくしてなびく心ある也。

真[三]草苅しなのゝ真弓我ひかばうま人さびていなといはんかも(九六)

此点に、水こもと書たるもあれども真草よろし。み草かるしなのとつゞくる事、しなのとは白野と云詞也。同韻相通也。あかさたな、はまわらやの相通也。秋野に尾花いでなびきてしろくみゆるによそふる也。万木千草多といへども、神祇を祝かざり奉る事は榊をみ榊と云[いひ]、すゝきをみ草と云べし。みくさとてすゝきを御ぬさにする事あり。天の岩戸にこめ給しときも、薄を御ぬさにしたる事あり。訪[諏訪]方明神のみさ山のかりには、花すゝきをとりてぬさに奉ると云事是也。しなのゝま弓と云事、むかし信濃よりの土産とみえたり。大宝年中の比也。うま人と云事は、むかし百済国より馬をこの国へ奉りけるに、おほくなかれ[り]ければ、いみじくかたき物にして、秦(ハタ)氏の先祖、是をよくのれり。御門いみじき物にし給ひて、伊駒山に放てかはしめ給ひけり。御門のおぼえ有ける人、給て是を乗てありきける。されば、馬に乗たる人をやんごとなき人にしけり。さてそのかみ、よき人をば馬もたる人のこと云けり。それは其代には馬人のこといふなり。まうとゝいふ事も是によることもあり。さびて[と]はさびしめ[て]と云詞也。彼久米禅師、石川市[郎]女を恋るとき、我ひかばうま人さびていなといはんかもとよめり。彼乙女をほめてかくいへる也。[おと]女[が]返し、み草かるしなのゝまゆみひかずてしゐざるわざを[しるといはなくに　人もひかずしてしひたるわざを]我しると云べきにあらずと読り。

秋山の木の下隠ゆく水のわれこそまさめみおもひよりは(九二)

此哥、秋山の木のしたを人しれず行水を、我こそまさめは、水はます物なればいへり。そなたのおもひよりはとよめり。秋山用にたゝねども、げに哥のかざり、又哀なるかたも一入侍にや。

あづさ弓ひかばまに〳〵よらめども後の心をしりは[か]てぬかも(九八)

是も石川のをとめの哥也。後の心をあやぶむ心也。

玉かづら実ならぬ木にはちはやぶる神ぞつくといふならぬむ[木こと]めに(一〇一)

此哥は、神の社などに、大なる木に花開てみもならぬかづらなどのある也。それがさすがにめにたつさまなれば、神ぞつくと云。なら

ぬ木毎にとそへたる也。此哥は、大伴安麿、巨勢の乙女をおもひかけてよめるうたなれば、みならぬ木にとは、思事のならぬ物から心をつくといふ事也。心は玉しゐ也。玉しゐは神也。又、男すべきほどの女の、男のなければ鬼魅に領ぜらるゝなどよめる歟。乙女のかへし、玉かづら花のみさきてみならずあるは誰恋にあらめ我恋おもふをとよめる也。是はうけひきたる哥也。

足曳の山のしづくにいも待と我立ぬれぬ山のしづくに（一〇七）

此集に、如此かへして又山の滴になど読る事多し。あまりたるやうなれど、切なるところをいはんためなれば、二度いへる事殊勝なるものをや。此哥返しに、山のしづくにならまし物をとよめるは、雫になりては何の用か侍べき。但、我をまちてぬれんしづくになりて、君にはなれずあらばやとよめる、是も切なる心也。

大舟の津守のうらにつげしとはまさしにしりてわがふたりねし（一〇九）

此哥、第二句つもりのうらとは、うらなふうら也。津守連通と云ける人は、名だかき古[古]の博士也。されば、ことがきにも、大伴[津]皇子竊婚石川女郎ヲ時津守連通占露其事皇子御作哥一首云々。哥にも津守の浦につげしとはといへり。発句に、大舟のとよめる事は、津守といはんためのまくら詞也。大船は常にありくことなし。津にのみあれば如此よめり。又、津守のうら名所にもいへる哉。哥の心は、ひそかに乙女と契てふたりねし事をうらにてあらはしたりといへる歟。つげしとは後悔の心歟。

夕されば塩みちきなん住のえのあさかのうらの玉もかりてん（一一一）

私云、此哥、恋の哥とはみえず。玉もをおもふ人によそへて、塩みちきてさはりなからんさきにあふべしとよめる歟。

秋の田のほむけのよする方よりに君がよりなんこちたかりとも（一一四）

秋の田のほにいでぬれば、日をへてなびきまさる也。こちたかりとは、人ごとのいたましき也。秋の田のかたよりによるやうに我は君によりなん、人言はいたましくともといへり。

人ごとをしげみこちたみをのが世にいまだわたらぬあさ河渡る（一一六）

此哥は、人ごとのあまりしげくいたましくて、いまだあはぬ人にあへりといはれぬるなどよめり。いまだわたらぬあさ川わたるは、無名の心也。

ますらおやかた恋せんとなげゝ共しこのますらお猶恋にけり（一一七）

鬼のますらおと点ぜる本あり。あしき也。しこのますらおとよむべし。凶の心也。鬼と云字をしことよむ也。哥の心は、ますらおのたけき身にて、もろともにおもはぬ人を我のみやこひんとなげけども、しこのますらおにて猶こふるとよめり。

なげきつゝますらおのこのこふれ[ば]こそ我ゆふかみのひちてぬれけり[れ]（一一八）

是はいまのますら[お]のかへし也。なげきつゝこふれ[ば]こそ、わがかみのぬれけるらめとよめり。

わぎもこに恋つゝあらずは秋萩の開て散ぬる花にあらましを（一二〇）

是もいぜんのごとくに、恋つゝあらんずるには、ちりやすき花にもならばやとよめり。

大舟のはつるとまりのたゆたひに物おもひやせぬ人の子ゆへに（一二三）

此哥、大舟のとまるときにゆられやすからぬやうに、物おもひをす

るとよめり。

たはれおと我はきけ共宿かさず我をかへせるをそのたはれお（二六）

此哥、たはれおとは、なびきやすき好色の人を云也。色このむ男ときゝて、おもひかねて、いやしき女のまねをして火をとりにゆきたれども、とめずしてかへしければ、うらみてよめる哥也。をそとはそらごとゝ云心なり。かへし、

たはれおに我は有けりやどかさずかへせる我ぞたはれおに［は］ある（二七）

此心は、たはれおに我は有けりとは、好色のものは人の根［やう］をしりてこそいかなる人にもあふ事あれ、かりに火をとりにきたるものなどをとゞめぬ、誠のたはれおぞとよめり。

いにしへのおふな（嫗）にしてやかくばかり恋にしづまんたはらはのごと（二九）

おふなとは老女也。たはらはとは童女也。心は、いにしへのおふなとは、ふるき老女にしてわかき乙女のやうに恋にやしづまんとよめり。

石見のや高つの山の木の間より我ふる袖をいもみつらんか（三三）

是は、人丸石見につまをゝきてのぼる時の哥也。いもみつらんかとは、我思て忘［ぼうどく］ぬことにしておもひやりてもみるやとよめる也。

さゝのはは太山もそよにみだれども我はいもおもふ別きぬれば（三三）

私云、此哥は、いもにわかれて深山などにたびのやどりしてよめる也。さゝのははそよと打乱てあれども、我はたゞいもをおもふとよめり。此哥、末の集に、みだるめりといれり。惣じて万葉其外、古哥すこしづゝなをして入らるゝ事習也。みだるめりのときの心は、打乱てあるをみるにも、我はいも思ふ、わかれきぬればといふ心なるべし哉。

秋山におつる紅葉ばしばらくも散な乱そいもがあたりみん（三七）

此哥、木葉のしげく秋山に散みだれて、思ふ方をさふる心也。

おもふなと君はいふともあはん時いつと知てかわが恋ざらん（四〇）

私云、是は人丸が妻の哥也。おもふなと君はいふともとは、一向に我をおもふなと云にはあらず。さのみ心をくだきておもふなとなぐさめける也。さてこそ君はいふともあはんときいつとしりてか我恋ざらん、かへりこん日をもしらぬことを歎哥也。

挽歌　哀傷之事也。

人はいさおもひやすらん玉かづら影にみえつゝ忘られぬかも（四九）

此哥、玉かづらとは、女を玉かづらにたとへたる事あり。是は、近江天皇崩御の後、后の御哥也。人はいさおもひやすらん、我はおも影にのみ忘れぬかもといへり。此集にかもといふ事多し。哉と云心も有。又うたがふ心も有。これは哉なるべし。

かゝらんとかねてしりせば（五二）、さゝなみの太［大］山［守］なりせは（五四）、いさなとる（魚也）　あふみのうみ（五三）、皆おなじ哀傷哥也。

島の宮まがりの池のはなちどり人めに恋ていけにかづかず（七〇）

是は、日並王子死給て後、人丸哥。はなち鳥、これはかひたる鳥をはなつにはあらず。池にはなつ也。

いそのうへにおふるつゝじ（六六）

同時の哀傷也。此時舎人のよめる哥共云、

島の宮うへなる池のはなちどりあらいな行そ君まさず共（一七三）

あらいなとは、あらくなゆきそ也。

たかてらす我日の御子のいましせば島の御門はあれざらましを（一七三）

よそにみし真弓の岡も君ませばとこつ御門と殿ゐするかも（一七四）

天地とゝもにおへん（ハツル事也）とおもひつゝつかへまつりし心たがひぬ（一七六）

依多略之。是皆哀傷の哥なるべし。

飛とりの　あすかの河の　のぼりせに　おふる玉藻は（依多略也。）（一九四）

あすか川に玉もをよめる間、しるし侍也。（人丸長哥也。）

とぶとりの　あすかの川の　のぼりせに　岩ばしわたし　くだりせに

うち橋わたし（一九六）とよめり。

人丸長哥に云、

そともの国の　槙たてる　不破山こえて　こまつるぎ（一九九）とあり。不破に槙をよめる。こまつるぎとは下に付詞也。（末略之。）又、此哥の中にとりがなくあづまと云詞有。とりがなくあづまとは、暁啼とき先め鳥がときをしりてくゝと鳴をきゝて雄がなくゆへに、鳥がなく吾妻と云。又、あづまのあを明る心によめりとも云り。さてあづまの国とつゞくるは、日本武尊、ゑびすをたいらげてうすゐたうげに上りて、弟橘姫の海中に為龍神に入たまひしことを思て、三たび吾妻となげき給しゆへに、板東をなべてあづまの国といへり。

はにやすの池のつゝみのかくれぬの行末をしらずとねり［は］まどふ（二〇二）

はにやすの池は大和也。かくれぬとは、水のゆく共なき沼也。さてゆくゑもしらずとよめり。高市（タケチ）の皇子の死給へるとき人丸の短哥也。

秋山のもみぢをしげみまどひぬるいもをもとめん山路しらずも（二〇八）

此哥は、人丸妻死後かなしみてよめり。あき山のもみぢをしげみとは、時の事をいれてよめり。人は死てやみにまどふことなれば、もみぢをしげみまどひぬるいもをもとめん、やまぢしらずもと、当代山路を紅葉に分がたきことを引合てよめり。

去年見てし秋の月夜はてらせ共あひみしいもはいや遠ざかる（二一一）

此哥も人丸の妻死後の哥也。

海をかしこみ　ゆく舟の　かぢ引おりて　をちこちの（二三〇）とあり。是も人丸の長哥の中にあり。梶ひきおるとは、舟には梶取が舟のゆきてよかるべき方をはからひて、ひきなをしゆらぶる也。されば、それがよきかたへやらんとてひきむくるを引おるとは云也。

霊亀元年乙卯秋九月志貴親王をはうむる時の長哥ニ

あづさゆみ　手に取もちて　ますらおの　とも矢手ばさみ　たちむかひ　高円山に　春野焼（三三〇）とあるに、末に哀傷之詞有。（略之。）高円をいる的になしてよめる也。

たかまどの野への秋はぎいたづらにさきかちるらんみる人なしに（三三二）

是も志貴王子死給て、高円のはぎみはやす人なくて、いたづらにさきちるらんとよめり。

万葉集注抜書（抄）第三

雑哥

すべらきは神にしませばあま雲のいかづちのうへにいほりするかも（三三五）

いかづちとは山の名也。三室山の事也。いかづちの岡とも云り。大

泊瀬幼武天皇時、彼山のいかづちを取て御覧じけるより、是をいかづちの岳といふ也。

滝の上の御舟のやまにゐる雲のつねにあらんと我おもはなくに（二四二）

弓削皇子吉野にての御うた也。心は、雲は定まらぬ物なるに、世中の不定をよそへてよめる哥也。

いなみ[・]の野を行過かてにおもへれば心恋しきかこの島みゆ（二五三）

両所の名所いづれも播磨也。かこの島を故郷によそへてよめる也。

灯のあかしのなだの入日にや漕わかれなん家のあたりみん（二五四）

海路[の旅]哥也。家のあたりみゆとは、必我家のあかしにあるにてはなかるべし。あかしの里などをこぎはなれゆかんとよめり。

あまさがるひなのながちをこひくればあかしのとよりやまと島みゆ（二五五）

の哥は淡路なるべし。羇中遠望の心也。

気比のうみにはよくあらしかりこもの乱てみゆるあまの釣舟（二五六）

にはよくあらしとは、なぎたる時を云也。かりこもの乱てみゆるとは、みだるゝといはんため也。

いつしかも神さびけるかかぐ山のむ杉が本に苔むすまでに（二五九）

む杉がもとに[苔むすまで]とは、古木にあらず。若木の杉也。老木にては云にをよばず。いつしかにと云心、若木と心得べし。[む]杉は鉾杉といふことも侍にや。

武士の八十宇治川のあじろ木にいさよふ波のゆくゑ知ずも（二六四）

此哥は、人丸近江よりのぼるとき宇治見[にて]よめり。行衛しらずもとは旅の心也。ながるゝ波のゆくゑなきによそへたる也。

くるしくもふりくる雨か（二六五）の哥、只旅の哥也。面のごとし。

あふみのうみ夕波ちどりながなけば心もしのにいにしへおもほゆ（二六六）

うたの心は、夕波に千鳥さびしく啼を聞て古をおもひいづる心也。なげなくは汝がなく也。

我せこがいにしへの里のあすかにはちどり啼也しま待かねて（二六八）

長屋王哥也。しま待かねては、しばし待かねてと云也。まとはと同韻也。古郷にてとふべき人などのあるをまちてよめるならん。

たびにして物恋しきに山もとのあけのそほ舟興にこぐみゆ（二七〇）

あかく色どりたる舟也。哥心は、たびにして古郷などをおもひてねられぬに、山本明わたりておきに舟などのゆくをみたる心也。

しはつやま打こえ見れば（二七二）の哥、しはつ山は近江歟。古今ニハ打いでゝみればとあり。惣而ふるき哥を少なをして集に入らるゝ事[おほ]し。別に不可心得歟。

いそさきをこぎたにゆけば[みイ]近江の海八十の湊にたづさはに啼（二七三）

いそさき名所也。八十の湊名所と云事もあり。又、近江には山〳〵の河水海におつるを、数おほきにより八十の湊共いへり。たづさはになくはさはぐ也。私云、此集にさはにと云事、多き心也。若是も多啼心歟。

しかのあまはめかりしほやきいとまなみつげのをぐしを取もみなくに（二七八）

私云、此つげのをぐしを食物いるゝものと哉ら書たる物見侍りし、いかにぞや。此集にはかみけづる小櫛とかけり。若いやしきものなれば、かみけづるくしなどもとらぬと云心歟。

わぎもこにいなのはみせつ名次山つのゝ松原いつかしめさん（二七九）

是は名ある所をみせたる心也。いつかしめさんは、しめてみせんと云心歟。

しらすげのま野のはぎはら（二八〇）

白菅は花白くさける物なればいへり。此真野は大和也。

我命まさしくあらば又もみんしがの大津によする白波（二八八）

志賀の大津面白所なれば、我命まさにあらば又きてみんといふ也。

しのすゝきくめのわが子がいましける三穂の岩やは荒にけるかも（三〇七）

ほにいでぬすゝきをしのすゝきと云は、しのぶと云詞也。下略也。ふるく人の住たる岩やをみてよめる也。次哥に、ときはなるいはやはいまもありけれどゝいふ、其同時哥也。私云、しのすゝきくめとつゞくは来の字の心と注にあり。其心難得。

昔こそ難波ゐ中といはれけめいまは宮人そなはりにけり（三一二）

此哥、宇合卿、難波都をあらためつくらるゝ使にてよめり。仁徳の後田舎と云けるにや。時代可勘。

ひんがしの市のうへ木のこだるまであはぬ君ゆへ我恋にけり（三一〇）

門部王詠東市樹とある。心は恋也。こだるまでは、年へてえだなどたれたる木也。木垂也。

田子のうらにうちいでゝみれば（三一八）

富士を遠望したる哥也。富士は信濃のあさまと一体の神也。浅間大井と申也。本地胎蔵界大日也。葦高山明神は金[剛]界大日也。

藤波の花は盛になりにけりならのみやこをおもほゆ[す]や君（三三〇）

此哥は大伴四綱の哥也。つくしにてよめり。帥大伴卿の哥ニ、

わが命ときはならぬか昔みしきさの小河を行てみんため（三三三）

あさぢ原とさまかくさま物おもへば古にし里のおもほゆる哉（三三三）

忘草わがひもにつくかぐ山の古にしさとを忘ぬがため（三三四）

いづれも大和をしのぶ哥也。此内忘草の哥、わすれぬがためとあるは、てにはあしく心得つれば理知がたし。かぐやまのふりにし里の忘がたくてこゝろぐるしければ、忘草をもわがひもに付てしるしを見、愁をわすれんと也。されば忘れぬが為と云ための字也。わすられぬほどに其為にと云心也。

しらぬひのつくしのわたは身につけていまだきね共あたゝかにみゆ（三三六）

つくしはわたのある国歟。しらぬひの綿いにしへは可然。人の綿を絹などにもいれねども、ぬひつゞけてき給けり。又、綿ともいはで、しらぬひのつくしとばかりよめるもあり。しらぬ火のつくしと云儀也。注依多略之。

いける人つゐにもしぬる物にあれば此世なるまはたのしく[を]あれな（三四九）

是はさけをほむる哥也。酒をのみてたのしめと云心也。酒は夜光の玉にもまされりともよめり。

世中を何にたとへん朝ぼらけこぎ行舟の跡なきがごと（三五一）

此心は、何にたとへんといひて、こぎゆく船の跡なきがごとしと又思かへしていへる也。拾遺には跡の白波と有。是も、ことばをすこしひきなをしていれり。

なはのうらにしほやく煙夕されば ゆき過かねて山にたな引（三五四）

なはのうら、津のくにといへり。此哥山にたなびくとよめり。若国

各別歟。可尋之。

みさごゐるあらいそに生るなのりその名乗はつげば[よ]親は知共（三六三）

恋哥也。おやはしるともと云は、親のいさむる事なればかくよめり。

しつの岩や（三五五）の哥は吉野也。三輪明神大なんぢの神のましますと也。

雨ふればさゝんとおもふかさの山（三七四）、三笠のやまの次にあり。御笠の山を笠のやまともいへる歟。石上乙丸朝臣哥也。

あきづ羽の袖ふるいもを（三七六）、あきづはとはうすき物也。乙女などのそでのうつくしきうすものをよめり。

青山の嶺の白雲朝にけに常にみれ共めづらしき我君（三七七）

哥の心、青山にしろき雲の立たるは、めに付べき事也。朝にけには朝夕也。古今には朝なけとも云り。此山の雲の白きごとく、朝夕みれどもあかぬ君ぞとよめり。

いにしへのふる[か]きつゝみは年ふるき池の渚に水草生にけり（三七八）

藤原の古宮の池なるべし。

譬喩哥

かるの池の入江めぐれる鴨すらも玉ものうへに独ねなくに（三九〇）

かるの池、いづくの池をも云べけれ共、鴨とかるとはひとつなる間、えんによりてよめり。心は、入江めぐれる鴨すらとは、鴨はちぎりふかき物にて、霜よにはたがひにはらひてぬるを、わがつまはとひくる事なくて独ぬるをうらみてよめり。

とぶさたてあしがら山に舟木きり木にきりよせつあたら船木を（三九一）

とぶさたてとは、をのと[を]も云り。又、木切時くづのちるをも云。又、木の末をも云。舟木切二ハかたはらの木に切よせじとする也。舟は物にさへらるゝをいむ物なれば、其故によき木なれども舟にせぬ也。さればあたら舟木をとよめり。心は恋の哥也。心にしめて過にし人、思の外にやらじとおもふかたになびきぬれば、あたら舟木をとよそへたり。舟につくらましかば、くちはてんまでも我にしたがひ、我も身をやどすよすがとしてはなれざらましをとよめり。

見えずとも誰恋ざらん山のはにいさよふ月をよそにみてしか（三九三）

山のはとはたかき思にたとへ[ふ]、いさよふ月とは、日くるればまたるゝ心也。みえずとも誰恋ざらんとは、こゝにみえずとも山のはにいさよひたる月のほのめくを、なをこひしきによそふ。みてしかとは、がなとねがふこと葉也。切なる心に中〳〵よそにみてしがなとよめり。

つくまのにおふるむら萩きぬにすりいまだきなくに色にいでにけり（三九五）

心はふかく君にそめしより、いまだあはぬさきにも思色ふかくして、人にしらるゝにたとへたり。

みちのくのまのゝかやはら遠けれど俤にしてみゆと云物を（三九六）

みちのくはおもひのふかきにたとふ。かやはらは恋のしげきにたとふ。遠けれどゝはいまだあはぬにたとふ。いまだあはねどおもかげにたちてみゆる心也。

いもが家にさきたる花の梅花実にしなりなばともかくもせん（三九九）

花にめでゝよそながらみるをば夫婦とならざるにたとふ。みにしなりなばとは、契まこと有てひとつ身になれるにたとふ。

ちはやぶる神のやしろの[し]なかりせばかすがのゝへにあはまかましを（四〇四）

此哥は女の哥也。神の社しなかりせばとは、定て妻あるらんとをそれて社にたとふ。古哥に、人づまは森か社かからくにのとらふす野べかねて心みんと云がごとし。もろ〳〵の種なる物あれどもあはをよめるは、あはまし物をと云心也。をそるべき事だになかりせば、後にもあはんとちぎりをかましとよめり。契をむすばん種也。春日は神のます所なれば、よそへてよめり。

すまのあまの塩やき衣の藤衣まどをにしあればいまだきなせれず（四一三）

藤衣はいやしき者のきたるをいへり。まどをにしあればとは、あしき布はうすく「して」間の遠き也。それを我中の遠くてきなれずとよそへたり。古今には、塩焼衣おさをあらみまどをにしあれや君がきまさぬ　是も詞を少かへていれり。

挽哥

豊国のかゞみのやまに岩戸たてかくれにけらしまてどきまさず（四一八）

是は哀傷の哥也。此鏡山より死出山へ行といふ事あれば、河内の王を彼鏡山にて葬時、其心をおもひよそへて読り。

岩戸わるたぢからもがな手をよはき乙女にしあればすべのしゝなく（四一九）

此うたは、あまの岩戸あけたりけん事をおもひて、このかゞみ山の岩門をあけて、なき人を二度みばやとよめる歟。

こもりくの初瀬の山のやまぎはにいさよふ雲はいもにかもあらん（四二八）

土形娘子を泊瀬山にて葬煙をいさよふ雲とよめり。祝言の砌などには可心得也。

山のはにいづものこえは霧なれや（四二九、同心也。

わぎも子が見しとものうらのむろの木（四四六）

いそのうへにねばふむろの木（四四八）

人もなきむなしき家は草まくら（四五一）

此三首、帥大伴卿、妻にをくれて上京の時哥也。

今よりは秋風さむく成なんをいかでか独ながきよをねん（四六二）

家持がつまにをくれてよめり。弟書持和する哥、

ながきよを独やねんと君がいへば過にし人のおもほゆらくに（四六三）

うつせみの世は（四六五、いでゝ行道しらませば（四六八、世中はつねかくのみ（四七二、さほやまにたなびく霞（四七三、此四首同心を家持よめり。

大あらき（荒城）の時（四四一、死期の時也といへり。

うち日さす　宮古（四六〇、宮の内はたかき物なれば、日の光さし入てらす心也。宮の内はかざりてかゝやく心也。

万葉集注抜書第四

相聞

山のはにあぢむら駒はさるなれど（四六六、あぢむら駒とは、白馬駒影なども云ひて、ひまゆくこまなどのごとし。やまのはに日影のさる心をいへり。又、あぢむらさはぎゆく共、我はさびしもとよめりともいへり。私云、あぢむらばかりならばしかり。駒と云義如何。只隙ゆくこまの心歟。

朝日影にほへるやまにてる月のあかざる君を山ごしにして（四九五）

心は、西の山のはちかき在明の月は、光もてらしながら、夜のあくるにしたがひて朝日のいでなんとするよそほひのうつろふは、あかぬ名残によそへよめり。山ごしは、へだつる心也。

みくまの丶うらのはまゆふ百重なる心は思へどたゞにあはぬかも(四九六)

伊勢の御くまの也。はまゆふ、大臣の大饗の時、雉の別足をつゝむ也。哥の心は、もゝへにおもへどもあはぬと歎也。此はまゆふに恋しき人の名をかきて枕にもし、衣などにもそへてしけば、夢におもふ人みゆるとなん。定家卿哥云、時のまのよはの衣のはまゆふやなげきそふべきみくまの丶うらとあり。紀伊国にもはまゆふをよめり。五上直也。

神風やいせのはまおぎ(五〇〇)、男のいせへ下るをおもひやりてよめる也。

乙女子がそでふるやまのみづかきの(五〇一)

石上布留の山をいふ共云り。十二巻に、わぎもこやあ[吾]をわするゝ[らす]な石上[袖]ふる川[の]たえんと思や　依之いへり。八雲御抄には吉野に有と云。神女下によれり。みづかきはひさしき事ニ読り。

夏野ゆくをしかの角のつかのまもいもが心を忘て思や(五〇二)

夏の鹿は角おひそめてみじかくて一束斗なるをいへり。

いまさらに何をかおもはん打なびき心は君によりにし物を(五〇五)

此哥は、君になびきてより心のほかに何をかさらにおもはんといへり。私云、とにかくに物はおもはずひだ人のうつすみなはのたゞ一すぢにと云心歟。

あつぶすまなごやがしたにふせれ共妹としねゝばはだへ寒しも(五一四)

あつぶすまは、やはらかにあたゝかなる也。なごやのやは詞の助也。ちどりなくさほの川とのせを広みうち橋わたすながくと思へば(五一八)

[哥の心は、さほ川の広き瀬にも、せながくると思へば]うちはしをわたすとよめり。

おもはぬを思といはゞ大野なるみかさの杜の神も知らん(五六一)

御笠の杜、筑前国也。心は、我偽なき心を[神も]かゞみてしりたまはんとよめり。

とことはにかよひし君が使こず今はあはじとたゆたひぬらし(五四三)

みな人をねよとのかねはうつなれど君をしおもへばいねかてにかも(六〇七)

忘草我したびもにつけたれどおにのしこ草ことにし有けり(七一七)

菜葉云、恋をわすれんとて忘草(グサ)を付たれど、なを恋しければ、しのぶ草にて有けるよとよめり。おにのしこ草をしのぶ草と云。一名也。忘草をしのぶといふにはあらず。をしていふ也。同物也といふ事もあれど、こゝにてはかなはず。

やますげのみならぬことを我によりいはれし君は誰とかぬらん(五六四)

私云、山すげのみならぬとは実[の]ならぬ物をや。心は、ならぬことゆへに我人名をば立て、いづくの誰とかぬらんとうらみたる[哥]也。

草まくらたびゆく君をうつくしみたぐひてぞこしじかの浜へを(五六六)

つくしの志賀をよめり。心は、志かの浜の眺望おもしろきを、うつくしき君にたとへてよめり。

周防なる岩国山をこえん日は手向よくせよあらきその道(五六七)

私云、是もたびなる人をおもひやるによりて恋の部ニ入歟。

ますかゞみあかざる君にをくれゐてあした夕に恋つゝやをらん(五七二)

此哥は、帥大伴卿上京之後、満誓よみてのぼせたる哥也。大伴卿返哥、

こゝにありてつくしやいづこ白雲のたなびく山の西に有らし（五七四）
私云、両首男女のうたにあらず。友などを恋るも相聞の哥ニ入り。後撰などにも如此ある歟。
草香江の入江にあさるあしたづのあなたづ〳〵し友なしにして（五七五）
まへの心におなじ。
いせのうみのいそもとゞろによする波かしこき人に恋渡るかも（六〇〇）
私云、とゞろによする波かしこきとは、をそれたる心也。我よりうへの人などを恋る心歟。
心にも我はおもはずさらに又わがこふる里にかへりこんとは（六〇九）
此哥、恋と心得がたし。立別つる里（男）、さらに又わが故郷にかへりこんとは心にもおもはず。家持を笠郎女うらみたる心歟。
めにはみて手にはとられぬ月のうちの桂のごとき妹をいかにせん（六三二）
哥ニ無不審。かつらのごとき君にも有哉と侍哉らん。
かすがやま朝ゐる雲のおぼつかなしらぬ人にもこふる物かも（六七七）
朝ゐるくものふかくていづれともしらぬを、はじめたる人などによそへたる也。
ちどりなくさほのかはらのきよきせを馬打わたしいつかかよはん（七一五）
我恋る人のなびきて、いつか馬打わたしかよはんとよめり。
かくばかり恋つゝあらずは岩木にもならまし物をもの思はずして（七三二）
是も、恋つゝあらんずるには岩木にもならましとよめり。物おもはずしては心なき義也。私云、本注にあらんずるにはとかけるうへは愚意をやりがたしといへども、此集一向にあらぬ文字をかける事も侍れど、此あらずはなどのずは、不の字にて其心大略たがはず。若恋つゝあらずは岩木にもにてや侍らん。心は、かくおもひのかなしきにより、恋せぬ身にだにあらば岩木にもなりて有なん、恋する身ほどうき物はなしとよめる歟。

万葉集注抄書第五

雑哥
いかにあらん日の時にかも声しらん人のひざのうへ我枕せん（八一〇）
此哥は、梧桐の和琴の、夢に女と化して読る哥となん。
梅花哥
春されば先咲宿の梅花ひとりみつゝや春日くらさん（八一八）
春さればと云ことをさる心に云人あり。不然。春なれば、春にしあればなど云心也。此抄書の本、梅花五首哥に無不審。
松浦川かはのせはやみ紅のものすそぬれぬあゆかつるらん（八六一）
まつら川にあゆつることは、皇后のうらかたに釣給て、あなめづらやとのたまひけるよりよめり。
まつらがたさよ姫の子が（八六八）と云哥、只さよ姫といふ。其子にはあらず。
玉しまの此河上に家はあれど君をやさしみあらはさずありき（八五四）
君をやさしみとは、はづる心也。
あまさがるひなに五とせすまひつゝ都のてぶり忘られにけり（八八〇）
ひなに五とせは、受領の任、遠国は六ヶ年なれば五とせといへり。都のてぶりとは、都の振舞也。述懐の哥也。
ひとつ世に二たびみえぬ父母をゝきてやながく我別なん（八九二）
これも述懐のうた也。

なぐさむる心はなしに雲がくれなき行かりのねのみしなかる（八九八）
水なわなすもろき命もたくなわのちいろにもがとねがひつるかも［哉］（九〇二）

此両哥は、老たる人の病おもりて子を思てよめると云り。

万葉集注抄書第六

雑哥

養老七年五月幸吉野離宮時金村短哥

としごとにかくもみてしか御よしの丶清き河内の滝のしら波（九〇八）
山たかみしらゆふ花に落滝つたきの河内はみれどあかぬかも（九〇九）

哥に別の心なし。幸のときの心なれば、年毎にみばやといひ、みれどあかぬなど［丶］よめり。

みよしの丶あきづの川は万代に（九一一）とあるも同時の哥也。
ちどりなくよしの丶川（九一五）、わかのうらにしほみちくれば（九一九）、万よにみるともあかんや（九二二）、いなみの丶あさぢをしなみ（九四〇）、うば玉のよの更ゆけば（九二五）、あしひきのやまにも野にも（九二七）、風ふかば波かた丶んと（九四五）、此七首、抄書にあり。哥に儀なし。

いざやこら香椎のかたに白たへの袖さへぬれて朝なつみてん（九五七）

帥大伴卿、彼浦にてよめる述懐の哥とあり。おもしろき所をかやうにいはんも述懐たるべし。

人なればむなしかるべし万代にかたりつぐべき名はた丶ずして（九七八）

山上憶良が哥也。心は、道ある名をものこさでむなしからんとかなしむ心也。

すまのあまのしほやききぬのなれなばか一日も君を忘ておもはん（九四七）

うたに義なし。赤人のうた也。

神亀四年丁卯正月長哥之中詞、

まくずはふ　春日の山は　うちなびき（九四八）とあり。又、高円山にうぐひす啼ぬとあり。返哥云、

梅柳すぐらくおしきみさほのうちにあそびしことは宮もとゞろに（九四九）

此うたは此長哥の反哥也。

大和路の吉備の小島を過てゆけばつくしのこ島おもほえんかも（九六七）

やまとぢのきびのとは、大和に都ある時はいづくよりゆくをも大和路のなにといへる也。

故郷のあすかはあれどあをによしならの飛鳥を見らくしよしも（九九三）

此うたは坂上郎女詠元興寺之里ヲ。飛鳥ニ一ケ所也。是は非故郷。

まゆのごと雲井にみゆる（九九八）の哥、眺望の心也。

やまのはにいさよふ月をいでんかと我まつ君しよは更にけり（一〇〇八）

哥の心は、待人を月によそへて、いざよひてをそきを怨哥也。

おくやまの槙のはしのぎふる雪のふりはます共土におちめや（一〇一〇）

此うた、しのぐはなびく心也。おくにみゆべし。葉のしげき木なれば、土におちめやといへるにや。

わがやどの花咲たりと告やらばこてふににたり散ぬ共よし（一〇一二）

月夜よしのうたは是を本哥にてよめり。哥心無儀。

ゆふたゝみたなかみやまをけふこえていづれの野へに庵りせんこら（一〇一七）

坂上郎女、賀茂にまいりて、其より逢さかをこえてやまとへかへるときのうた也。ゆふたゝみたとつゞくるは、ゆふは串にたゝみたる帋也。其下に手ある物なれば、たなかみとかさねたる詞也。

故郷はとをくもあらずひとへ山こゆる我からに恋ぞ我せし（一〇三八）

此うたは高岡河内連の哥也。聖武、伊勢へ行幸時道にてよめる也。私云、ひとへ山は山城泉河辺にあり。なら遠からざるべし。又、ひとへやまと云心につきて、へだてぬ心に遠くもあらずとよめる歟。

ますかゞみみぬめのうらは百舟の過てゆくべき浜ならなくに（一〇六六）

ますかゞみみぬめとは発語の句也。心は、面白名所なれば、すぎてゆくべき浜ならぬとよめり。

浜きよく[み]浦なつかしみ神代より千舟のとまる大わだの浜（一〇六七）

是も、みぬめのうらにて田辺福丸哥也。神代の謂、此注になし。可尋。